

# 青年期における自尊感情の揺れと自己概念との関係

原 田 宗 忠\*

本研究は、青年期における中期的な自尊感情の揺れと自己概念との関係を検討した。1ヶ月おきに3回、大学生243名にTS-WHY及び自尊感情尺度の質問紙を行い、自尊感情の揺れと、自己概念との関係を調べた。その結果、各次元の自己概念の延べ数や領域数などの水準によって、各次元の自尊感情の中期的な揺れの大きさには差があった。そして、肯定的自尊感情を高めたり否定的自尊感情を低める際に、自尊感情の揺れや自己概念へ介入する事が有効である可能性が示唆された。また、中期的な自尊感情の揺れは、自己概念を見直し、重要な自己概念を形成する契機にもなりうるという点で、必ずしも否定的に捉えられるべきではないと考察された。

キーワード：自尊感情の揺れ、自尊感情のレベル、自己概念、随伴性自尊感情、青年期

## 問 題

James (1892) 以来、自尊感情 (Self-esteem) は莫大な研究が積み重ねられ、抑うつ、学業成績、対人関係など様々な精神的健康や社会での適応と関連していることが明らかにされてきた。そして、自尊感情の先行研究では、自尊感情の高い者は低い者と比べて抑うつが低く (Tennen & Herzberger, 1987)、学業成績がすぐれ (Hattie, 1992)、対人関係のあり方もよい (Griffin & Bartholomew, 1994) ことが示されており、自尊感情の高さは健康や適応の指標と考えられてきた。

しかし、自尊感情の高い者は自己の欠点や失敗に関する情報を無視したり他のせいにして失敗から学ぶことができない (Dweck, 1986)、自尊感情が傷ついた時に他者に怒りや敵意を示す (Baumeister, Smart, & Boden, 1996) など、自尊感情の否定的側面も近年指摘されている (Crocker, 2002)。

こうした矛盾はなぜ生じるのであろうか。この矛盾を理解する方法として、自尊感情に安定性 (stability) の次元を考慮することが考えられている。自尊感情が揺れるものだという指摘は古くは James (1892) が行っているが、Rosenberg (1986) によると自尊感情の揺れは日々の出来事によって短時間の間で揺れる短期的な揺れ (自尊感情の変動性) と、月や年の間での長期的な揺れとがある。短期的な揺れを考慮し、安定した自尊感情と不安定な自尊感情とを区別すると、自尊感情が高くて不安定な者は高くて安定している者よりも怒りや敵

意を抱きやすい (Kernis, Grannemann, & Barclay, 1989)、抑うつが高い (Kernis, Grannemann, & Mathis, 1991)、否定的な情報に対して防衛的になる (Kernis, Cornell, Sun, Berry, & Harlow, 1993) と言われており、同じように自尊感情が高くても、自尊感情が安定しているか否かによって自尊感情の肯定的側面と否定的側面との現れ方が異なると考えられている。

では、なぜ自尊感情が揺れやすい者と揺れにくい者とがいるのだろうか。短期的な自尊感情の揺れの原因のひとつとして、自己概念が挙げられている。Kernis (2003) や小塩 (2001) は、自尊感情が短期間に揺れることは、自己概念の不明確さや貧困さ、自己概念の不安定さによって生じると考えている。また、Crocker (2002) は、自己複雑性理論 (Linville, 1985) から随伴性自尊感情の領域 (Crocker & Wolfe, 2001) の豊富さが自尊感情の安定につながるのではないかと述べている。随伴性自尊感情の領域とは個人が自分の価値を置き、重要視している領域を指し (Crocker, 2002)、梶田 (1988) の言う「自尊心を支える根」に相当すると考えられるが、Crocker & Wolfe (2001) は、自尊感情の揺れは随伴性自尊感情の領域に関連した肯定的出来事や否定的出来事が起こることで生じ、随伴性自尊感情の領域数が多いと、当該の領域で生じる揺れが生じても他の領域が緩和するため、自尊感情が安定するのではないかと考えている。

しかし、自己概念が豊富で、自己概念が相互に関係しあい、複雑であることが情緒反応や自尊感情の振幅への緩衝要因になるという緩衝仮説については、支持する結果 (Dixon & Baumeister, 1991; Linville, 1985) と支持しない結果とがあり (Woolfolk, Novalany, Gara, Allen,

\* 京都大学大学院教育学研究科  
〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
Munetada.Harada@p01.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

& Polino, 1995), Rafaeli-Mor & Steinberg (2002) は緩衝仮説を必ずしも支持できないと述べている。また、佐藤 (1999) はこの正反対の 2 つの仮説を調べるために、肯定次元と否定次元とを区別して研究を行った。その結果、陽性情緒反応に対しては肯定・否定ともに自己複雑性の効果は見られず、陰性情緒反応に対しては肯定的自己複雑性の緩衝仮説が支持された一方で、否定的自己複雑性の緩衝仮説は支持されなかった。この結果は、肯定的自己概念の複雑性と否定的自己概念の複雑性とが異なる働きをすることを示している。つまり、随伴性自尊感情の領域が複雑である事が自尊感情の安定性にどう影響するかについては、随伴性自尊感情の領域に関して肯定－否定の次元を考慮した上で改めて検討する必要があると言えるだろう。

さて、青年期は、今まで経験しなかった新しい経験に出会いやすく、自己の未熟さを知つて自尊感情が揺れることが多いと考えられる (溝上, 1999)。ひとつひとつの出来事に一喜一憂して短期的に自尊感情が大きく揺れることは、自己像のもうさや自己の基盤の弱さを示し、精神的健康に否定的な影響をもたらすと考えられよう。しかし、ある出来事で自尊感情が揺れたとしても、中期的、長期的にその自己概念に向き合い、自分の欠点に気づくことができれば、自尊感情の揺れは、より安定した自己概念を再構築する機会ともなりうるのではないだろうか。自己概念に中期的、長期的に向き合う事で生じてくる自尊感情の揺れは長期的な自尊感情の揺れに相当すると考えられるが、現在のところ、中期的、長期的な自尊感情の揺れと自己概念との関係は明らかではない。よって、本研究では、随伴性自尊感情の領域に関して肯定－否定の次元を考慮し、3ヶ月という一定期間を用いて、中期的な自尊感情の揺れと自己概念との関係を明らかにすることを目的とする。

ところで、様々に保持されている自己概念の中でも、自尊感情を支える自己概念とは、個人にとってその自己概念が重要視されており、自尊心の根に相当する自己概念である (Crocker & Wolfe, 2001; 溝上, 1999)。個人にとって重要な自己概念を表出する方法としては、溝上 (1997, 1999) の WHY 答法がある。WHY 答法は、ある問題に対して答えた後、「それはなぜですか」という質問をする事によって、回答者がどのような理由からその問題に答えたかを尋ねるというものである。溝上 (1999) は、「私は、全体的には自分自身に満足しています」という自己評価センテンスを用い、「はい/ そう思います」「いいえ/ そうは思いません」の強制二択法で回答を求めた後、WHY 答法を用い、自己評価を支える自

己概念を表出させている。しかしこの方法では、「はい」と答えた調査対象者に対しては肯定的自己概念のみが、「いいえ」と答えた調査対象者に対しては否定的自己概念のみが表出され、表出されなかった次元の自己概念については明らかにすることはできない。また、肯定的自尊感情を支える自己概念と否定的自尊感情を支える自己概念が必ずしも同じ領域の概念だとは限らず、同程度分化しているとも限らないだろう。したがって、今回は、「はい」と答えた調査対象者にも「いいえ」と答えた調査対象者に対しても肯定、否定の両自己概念を表出するよう改良した。また、こうした方法で表出された自己概念が必ずしも調査対象者にとって重要な自己概念であるとは限らないため、表出された自己概念に対して調査対象者がどの程度重要視しているかを 5 段階で評定するよう改良した。これを TS (Two Sided) -WHY と名づけ、使用することにする。

では、中期的な自尊感情の揺れと自己概念との関係はどのようなものだろうか。まず緩衝仮説を考慮すると、様々な自己概念が豊富で分化していると、自己概念が揺らいだ際にも同一次元の他の自己概念がその次元の自尊感情を支えると考えられるため、自尊感情が揺れにくいと考えられる。よって、「肯定的自己概念数が多い群では肯定的自尊感情が揺れにくい」を仮説 1 とし、「否定的自己概念数が多い群では否定的自尊感情が揺れにくい」を仮説 2 とした。一方で両次元の自己概念をともに多く有していない場合、自己概念が安定して自尊感情を支える事は難しくなると考えられるであろう。したがって、「両次元の自己概念をともに多く有していない場合、自尊感情が揺れやすい」を仮説 3 とした。しかし、肯定的自己概念も否定的自己概念をともに多く有する場合には、個人内で肯定的自尊感情と否定的自尊感情が同時に起こり、葛藤が生じると考えられよう。よって、「両次元の自己概念をともに多く有している場合、自尊感情が揺れやすい」を仮説 4 とした。

## 方 法

**調査対象者** 近畿、中国地方の私立大学学生。各回の調査参加者は 1 回目 346 名、2 回目 331 名、3 回目 317 名であった。このうち 3 回全ての調査に回答した 243 名 (男性 123 名、女性 120 名、平均年齢  $19.54 \pm 1.32$  歳) を調査対象者とした。

**調査時期及び手続き** 2004 年 4 月から 7 月にかけ、一般教養科目の心理学の概論の授業を利用し、1 ヶ月間隔で計 3 回、以下の調査内容を含む同じ質問紙を実

施した。なお、希望者には結果のフィードバックを約束し、3回の調査後にフィードバックを行った。

**自尊感情の高さと揺れ** Rosenberg (1965) は自尊感情を他者との比較抜きに自己の価値を感じることと定義し、自尊感情には自己の欠点を改善し乗り越えようとする姿勢が含まれる点で、類似概念の自己受容とは異なると述べた。溝上 (1999) の自己評価尺度のうち、個人基準自己評価項目 14 項目 (肯定次元 7 項目、否定次元 7 項目) は、社会一般の基準からではなく個人の基準から全体的自己に対して評価を行う際に生じる自己に対する感情を測定する尺度である。肯定次元項目の例としては、“私は、理想通りではないが、自分というものが好きです。”等が、否定次元項目の例としては“私は、今ままの自分ではいけないと思うことがあります。”等があるが、これらの項目には自己の価値を認めながらも、欠点を改善し、乗り越えようとする前向きな姿勢も含まれていると考えられよう。つまり、個人基準自己評価項目は、多少の欠点は認めながらも、大筋では自分自身をよいと思える（思えない）という自尊感情を測定していると言える。よって、自尊感情の測定には溝上(1999)の個人基準自己評価項目 14 項目を用いた。なお、評定は“とてもよくあてはまる”から、“全くあてはまらない”的 5 件法で行った。

肯定次元項目の合計得点を肯定的自尊感情の高さ、否定次元項目の合計得点を否定的自尊感情の高さとした。また、肯定、否定各次元ごとに、個人の 3 回分の自尊感情の高さから標準偏差を算出し、各次元の 3 回分の変動とみなし、それぞれ肯定的自尊感情の揺れ及び否定的自尊感情の揺れとした。つまり、各次元の標準偏差が高いほど、その次元の自尊感情が揺れやすいということになる。

**自己概念** TS-WHY を用いた。TS-WHY の手順は以下の通りであった。最初に、“私は、全体的には自分自身に満足しています”という自己評価センテンスを用い、“はい/そう思います”“いいえ/そうは思いません”的強制二択法で回答を求めた。“はい”と答えた調査対象者には、「それはなぜですか？」という教示によって満足できる理由を思いつく限り回答させ、重要度を 5 段階で評定させた。回答が終わると、「一方で『自分自身に満足していない』と思う気持ちもどこかにあると思います。その気持ちが浮んできたら、その理由を教えてください」と教示し、満足できない理由を回答させ、どの程度切実に変えたいかを 5 段階で評定させた。一方で、最初の教示に対し“いいえ”と答えた調査対象者には、まず「それはなぜですか？」という教

示によって満足できない理由を尋ね、思いつく限り理由を回答させ、どの程度切実に変えたいかを評定させた後、「一方で『自分自身に満足している』と思う気持ちもどこかにあると思います。その気持ちが浮んできたら、その理由を教えてください」と教示し、満足できる理由を回答させ、その重要度を評定させた。なお、TS-WHY の制限時間は、両次元あわせて 10 分とした。

また、3回の調査における調査対象者の照合は、携帯電話の下 5 行を聞くことで、行った。

## 結 果

**自尊感情の高さと揺れとの関係<sup>1</sup>** 自己評価尺度の内的整合性を検討するために、各回ごとの  $\alpha$  係数を算出したところ、肯定次元では 1 回目から順に、 $\alpha = .81, .83, .85$ 、否定次元では 1 回目から順に、 $\alpha = .73, .76, .77$  であり、内的整合性は高かった。各回、各次元の自尊感情の高さの平均及び  $SD$  を Table 1 に示す。なお、自尊感情の高さは 3 回の各次元の自尊感情尺度の平均を各次元の自尊感情の高さによって求め、各次元の自尊感情の揺れは個人内における 3 回の各次元自尊感情得点の  $SD$  によって求めた。以下では自尊感情の高さという場合は 3 回の平均を、自尊感情の揺れという場合は 3 回のばらつき ( $SD$ ) を指すこととする。その結果、肯定的自尊感情の揺れの平均 ( $SD$ ) は 2.06 (1.26)、否定的自尊感情の揺れの平均 ( $SD$ ) は 2.11 (1.38) であった。自尊感情の高さ、揺れともに外れ値はなかった。なお、自尊感情の揺れには床効果がみられたため、対数変換をし、分析を行った。しかし、素データによる結果の解釈と対数変換を行ったデータによる解釈に

Table 1 Means and SD of Self-Esteem ( $N=243$ )

	Positive SE ( $SD$ )	Negative SE ( $SD$ )
Time 1	22.80 (5.29)	25.53 (4.63)
Time 2	22.93 (5.43)	25.35 (4.69)
Time 3	23.03 (5.63)	25.53 (4.74)
$M$ ( $SD$ )	22.92 (5.08)	25.47 (4.21)

Note. SE = self-esteem.

<sup>1~4</sup> なお、否定的自尊感情の高さにおいては女性が男性に比べて高かった。また、自己概念に関しては、肯定的自己概念延べ数、否定的自己概念延べ数、安定肯定自己概念数、肯定的自己概念の領域数、否定的自己概念の領域数において、女性が男性に比べて多かった。しかし、肯定的自尊感情の揺れ、否定的自尊感情の揺れに関しては性差が見られなかったため、本文では男女まとめての検討を行った。

**Table 2** Correlations Between Level and Stability of Self-Esteem ( $N=243$ )

	1	2	3
1. Level of Positive SE			
2. Level of Negative SE	-.55***		
3. Stability of Positive SE	-.10	.25***	
4. Stability of Negative SE	.17*	-.15*	.18**

Note. SE=self-esteem.

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ .

は差がみられなかった。したがって、以下の結果では素データによる結果を載せた。

自尊感情の肯定次元と否定次元とが異なるかを明らかにするために、まず各次元の自尊感情尺度の高さと自尊感情の揺れとの相関係数を算出した (Table 2)。その結果、肯定的自尊感情の高さは否定的自尊感情の高さとの間に負の相関が見られ ( $r = -.55, p < .001$ )、肯定的自尊感情の揺れと否定的自尊感情の揺れの間には正の相関がみられた ( $r = .18, p < .01$ )。肯定的自尊感情の揺れは否定的自尊感情の高さと正の相関 ( $r = .17, p < .01$ ) がみられたが、肯定的自尊感情の高さとは無相関であった。一方、否定的自尊感情の揺れは肯定的自尊感情の高さとの間に正の相関が ( $r = .17, p < .01$ )、否定的自尊感情の高さとの間には負の相関がみられ ( $r = -.15, p < .05$ )、両次元の自尊感情の高さとの間に関連が見られた。

次に、両次元の自尊感情の揺れの水準によって各次元の自尊感情の高さに相違があるかを確かめるために、調査対象者を肯定的自尊感情の揺れの中央値 2.0 で大小に 2 分割し (小群  $n = 125$ , 大群  $n = 118$ )、否定的自尊感情の揺れの中央値 1.7 で大小に 2 分割した (小群  $n = 116$ , 大群  $n = 127$ )。そして、肯定的自尊感情及び否定的自尊感情の高さを従属変数にして、肯定的自尊感情の揺れ (大小)  $\times$  否定的自尊感情の揺れ (大小) の 2 要因分散分析を

**Table 3** Means and SD of Level of Self-Esteem by Stability of Positive and Negative Self-Esteem

Stability of Negative SE	Stability of Positive SE	
	Stable	Unstable
Level of Positive SE		
Stable	22.77(5.14)	21.36(5.35)
Unstable	23.58(4.78)	23.60(5.20)
Level of Negative SE		
Stable	24.58(1.56)	27.61(4.38)
Unstable	24.85(3.65)	25.37(4.17)

Note. SE=self-esteem.

行った (Table 3)。その結果、肯定的自尊感情の高さについては、否定的な自尊感情の揺れ (大小) の主効果が有意であり ( $F(1,239) = 5.45, p < .05$ )、否定的自尊感情の揺れ大群は小群より肯定的自尊感情が高いと言えた。否定的自尊感情の高さについては、交互作用が有意であり ( $F(1,239) = 5.54, p < .05$ )、下位検定の結果、否定的自尊感情の揺れ小群では肯定的自尊感情の揺れ (大小) の単純主効果が有意で ( $F(1,239) = 15.39, p < .01$ )、肯定的自尊感情の揺れ大群では否定的自尊感情の揺れ (大小) の単純主効果が有意であった ( $F(1,239) = 8.51, p < .01$ )。つまり、否定的自尊感情の揺れが小さい群の中では、肯定的自尊感情の揺れが大きい群が小さい群に比べて否定的自尊感情が高いと言えた。また、肯定的自尊感情の揺れが大きい群の中では否定的自尊感情の揺れが小さい群が揺れの大きい群に比べて否定的自尊感情が高いと言えた。

**自己概念<sup>2</sup>** TS-WHY において、満足、不満足として表出された理由のうち、評定値 5 のもの (自分にとって「とても大切である」及び「とても変えたい」と評定したもの) を自尊感情を支える自己概念とし、それぞれ肯定的自己概念、否定的自己概念とした。また、3回の調査で表出された自己概念の合計数をそれぞれ肯定的自己概念延べ数と否定的自己概念延べ数とした。

**安定自己概念<sup>3</sup>** 自己概念が自尊感情を支えているのであれば、各次元に安定した自己概念の数が多いと各次元の自尊感情が安定していると考えられる。よって、3回の調査の中で、回をまたがって複数回表出された自己概念のうち、一度でも「とても大切である」及び「とても変えたい」と評定した自己概念をそれぞれ安定肯定的自己概念及び安定否定的自己概念とし、調査対象者ごとにその合計数を算出した。なお、同じ概念か否かの判断は、筆者を含む 3 人の心理学系大学院生によって表出された全自己概念の 30% にあたる 1452 の自己概念について合議し、91.60% と高い一致率が得られた後は筆者が 1 人で評定した。安定肯定的自己概念数の平均 ( $SD$ ) は 1.95 (1.45)、安定否定的自己概念数の平均 ( $SD$ ) は 2.30 (1.46) であった。

**自己概念の領域<sup>4</sup>** 随伴性自尊感情の領域の豊富さが自尊感情の安定につながるという知見を考慮すると、自尊感情を支える自己概念の領域数が多いと自尊感情が安定していると考えられる。よって、溝上 (1997) を参考にしながら、TS-WHY で表出された自己概念をカテゴリライズした。カテゴリ項目は、“性格 (personality)”, “対人態度 (social attitude, すぐ誰とでも仲よくなれる等)”, “人間関係 (relationship)”, “自信 (self-esteem)”,

“生活感情(feeling in daily life, 人生が楽しいから, 等)”, “向上心(ambition)”, “生活状況(life situation, お金に困っていないから, 等)”, “能力(ability)”, “夢(dream)”, “健康(health)”, “容姿(appearance)”, “その他(others)”の12項目とした。カテゴライズは、筆者を含む4人の心理学系大学院生によって全体の25%にあたる1210の自己概念について合議し、92.00%と高い一致率が得られた後は筆者が1人で評定した。表出された自己概念の中で「とても大切である」及び「とても変えたい」と評定した自己概念と、その表出率をTable 4に示す。3回の調査のうち1回でも調査対象者が表出し、「とても大切である」及び「とても変えたい」と評定した領域を、その調査対象者の自尊感情を支える自己概念の領域と考え、調査対象者ごとに領域の合計数を算出した。肯定次元の領域数の平均(*SD*)は2.61(1.67), 否定次元の領域数の平均(*SD*)は2.77(1.57)であった。

**独立変数の整理** 自己概念と、自尊感情の高さ及び揺れとの関係を調べるために、まず3回の調査の中で挙げられた肯定的自己概念の延べ数と否定的自己概念の延べ数を、それぞれの中央値8及び11で多少に2分割した(肯定的自己概念延べ数多群 *n*=115, 少群 *n*=128, 及び否定的自己概念延べ数多群 *n*=125, 少群 *n*=118)。次に、安定肯定的自己概念数と安定否定的自己概念数を、それぞれの中央値2及び3で多少に2分割した(安定肯定的自己概念数多群 *n*=135, 少群 *n*=108, 及び安定否定的自己概念数多群 *n*=110, 少群 *n*=133)。最後に、肯定的自己概念の領域数と否定的自己概念の領域数を、それぞれの中央値3及び3で多少に2分割した(肯定的自己概念領域数多群 *n*=122, 少群 *n*=121, 及び否定的自己概念領域数多群 *n*=115,

*n*=少群128)。

**自己概念と自尊感情の高さとの関係** 自己概念の数や領域の数の水準によって各次元の自尊感情の高さに相違があるかを確かめるために、各次元の自尊感情の高さを従属変数とし、肯定的自己概念延べ数(多少)×否定的自己概念延べ数(多少)の2要因分散分析、安定肯定的自己概念数(多少)×安定否定的自己概念数(多少)の2要因分散分析、肯定的自己概念領域数(多少)×否定的自己概念領域数(多少)の2要因分散分析を行った(Table 5, 6)。

肯定的自尊感情の高さについては、肯定的自己概念延べ数(多少)の主効果と否定的自己概念延べ数(多少)の主効果が有意( $F(1,239)=97.91, F(1,239)=28.54$ , ともに  $p < .01$ ), 安定肯定的自己概念数(多少)の主効果と安定否定的自己概念数(多少)の主効果が有意( $F(1,239)=36.16$  及び  $F(1,239)=22.91$ , ともに  $p < .01$ ), 肯定的自己概念領域数(多少)の主効果と否定的自己概念領域数(多少)の主効果が有意であった( $F(1,239)=45.56$  及び  $F(1,239)=22.62$ , ともに  $p < .01$ )。つまり、肯定的自己概念延べ数多群、安定肯定的自己概念数多群、及び肯定的自己概念領域数多群において、それぞれ少群よりも肯定的自尊感情が高かった。また、否定的自己概念延べ数少群、安定否定的自己概念数少群、及び否定的自己概念領域数少群において、それぞれ多群よりも肯定的自尊感情が高かった。

否定的自尊感情の高さについては、肯定的自己概念延べ数(多少)と否定的自己概念延べ数(多少)との交互作用が有意であり( $F(1,239)=4.12, p < .05$ ), 下位検定の結果、肯定的自己概念延べ数多群、少群ともに否定的

**Table 4** Percentage of Self-Concepts (Rated 5) Presented in TS-WHY

Positive Self-Concepts		Negative Self-Concepts		
%	( <i>N</i> =1302)	%	( <i>N</i> =1497)	
30-40		personality	38.1	
20-30	relationship	21.5		
10-20	personality social attitude feeling in daily life	18.7 15.8 10.4	social attitude ability	18.6 11.2
0-10	life situation ability dream health self-esteem ambition appearance other	5.8 4.9 4.5 4.5 3.5 1.5 1.0 8.0	appearance relationship dream life situation feeling in daily life health ambition self-esteem other	9.2 3.4 3.4 3.1 3.0 2.9 2.5 1.9 2.7

**Table 5** Means and SD of Level of Positive Self-Esteem by Positive and Negative Self-Concepts

Negative		Positive	
Self-concepts			
Self-concepts		Few	Many
Few		21.57(4.35)	27.53(3.29)
Many		19.37(4.58)	24.01(4.19)
Stable self-concepts		Few	Many
Few		21.73(4.71)	26.21(3.88)
Many		19.89(4.52)	22.45(5.05)
Domains of self-concepts		Few	Many
Few		22.80(4.12)	25.96(4.46)
Many		19.34(4.67)	23.95(4.57)

Note. SE = self-esteem.

**Table 6** Means and SD of Level of Negative Self-Esteem by Positive and Negative Self-Concepts

Negative		Positive	
Self-concepts			
Self-concepts		Few	Many
Few		25.43(3.93)	22.44(4.31)
Many		27.26(3.09)	26.28(4.07)
Stable self-concepts		Few	Many
Few		25.37(3.80)	23.81(4.44)
Many		27.01(3.19)	26.37(4.39)
Domains of self-concepts		Few	Many
Few		24.18(4.12)	23.43(4.14)
Many		27.49(3.01)	26.43(4.19)

自己概念延べ数(多少)の単純主効果が有意であったが( $F(1,239)=7.19$ ,  $F(1,239)=28.38$ , ともに  $p<.01$ ), 肯定的自己概念延べ数(多少)の単純主効果は否定的自己概念延べ数少群においてのみ見られた( $F(1,239)=17.52$ ,  $p<.01$ )。また, 安定肯定的自己概念数(多少)の主効果と安定否定的自己概念数(多少)の主効果が有意であり( $F(1,239)=4.43$ ,  $p<.05$  及び  $F(1,239)=16.01$ ,  $p<.01$ ), 肯定的自己概念領域数(多少)の主効果が有意傾向, 否定的自己概念領域数(多少)の主効果が有意であった( $F(1,239)=3.26$ ,  $.05< p < .10$  及び  $F(1,239)=39.64$ ,  $p<.01$ )。つまり, 有意傾向も含めると, 肯定的自己概念延べ数少群, 安定肯定的自己概念数少群, 及び肯定的自己概念領域数少群において, それぞれ多群よりも否定的自尊感情が高かった。一方, 安定否定的自己概念数多群と否定的自己概念領域数多群において, それぞれ少群よりも否定的自尊感情が高かった。また, 否定的自己概念延べ

数が少ない場合にのみ, 肯定的自己概念延べ数が少ない群が多い群に比べて否定的自尊感情が高かった。

**自己概念と自尊感情の揺れとの関係** 自己概念の数や領域の数の水準によって各次元の自尊感情の揺れに相違があるかを確かめるために, 各次元の自尊感情の揺れを従属変数とし, 肯定的自己概念延べ数(多少)×否定的自己概念延べ数(多少)の2要因分散分析, 安定肯定的自己概念数(多少)×安定否定的自己概念数(多少)の2要因分散分析, 肯定的自己概念領域数(多少)×否定的自己概念領域数(多少)の2要因分散分析を行った(Table 7, 8)。

肯定的自尊感情の揺れでは, 否定的自己概念延べ数(多少)の主効果, 及び否定的自己概念領域数(多少)の主効果が有意( $F(1,239)=5.39$ ,  $F(1,239)=5.50$ , ともに  $p<.05$ ), 肯定的自己概念領域数(多少)の主効果が有意

**Table 7** Means and SD of Stability of Positive Self-Esteem by Positive and Negative Self-Concepts

Negative		Positive	
Self-concepts			
Self-concepts		Few	Many
Few		1.95(1.19)	1.77(0.99)
Many		2.26(1.40)	2.20(1.33)
Stable self-concepts		Few	Many
Few		1.93(1.10)	2.07(1.32)
Many		2.02(1.30)	2.20(1.29)
Domains of self-concepts		Few	Many
Few		1.65(0.94)	1.07(1.36)
Many		2.14(1.27)	2.33(1.34)

**Table 8** Means and SD of Stability of Negative Self-Esteem by Positive and Negative Self-Concepts

Negative		Positive	
Self-concepts			
Self-concepts		Few	Many
Few		2.07(1.44)	2.57(1.51)
Many		1.83(1.26)	2.04(1.25)
Stable self-concepts		Few	Many
Few		2.13(1.35)	2.41(1.55)
Many		1.96(1.34)	1.84(1.15)
Domains of self-concepts		Few	Many
Few		2.29(1.55)	2.28(1.33)
Many		1.70(1.07)	1.95(1.32)

傾向であり ( $F(1,239) = 3.68, .05 < p < .10$ ), 有意傾向も含めると, 肯定的自尊感情は, 否定的自己概念延べ数が多い群, 否定的自己概念領域数の多い群, 肯定的自己概念領域数の多い群で揺れやすかった。

一方, 否定的自尊感情の揺れでは, 肯定的自己概念延べ数(多少)及び否定的自己概念延べ数(多少)の主効果が有意 ( $F(1,239) = 4.12, F(1,239) = 4.76$ , ともに  $p < .05$ ), 安定否定的自己概念数(多少)の主効果が有意 ( $F(1,239) = 4.38, p < .05$ ), 否定的自己概念領域数(多少)の主効果が有意傾向であり ( $F(1,239) = 3.37, .05 < p < .10$ ), 有意傾向も含めると, 否定的自尊感情は, 肯定的自己概念延べ数が多い群, 否定的自己概念延べ数の少ない群, 安定否定的自己概念数の少ない群, 否定的自己概念領域数の少ない群で揺れやすかった。

## 考 察

**仮説の検討** まず, 「肯定的自己概念数が多い群では肯定的自尊感情が揺れにくい」という仮説1であるが, 肯定的自己概念と肯定的自尊感情の揺れとの関係では, 肯定的自己概念の領域数が多い群では肯定的自尊感情が揺れやすい傾向が見られた。したがって, 仮説1は支持されなかった。

次に, 「否定的自己概念数が多い群では否定的自尊感情が揺れにくい」という仮説2であるが, 否定的自己概念と否定的自尊感情の揺れとの関係では, 有意傾向も含めると, 否定的自己概念延べ数の多い群, 安定した否定的自己概念数の多い群, 否定的自己概念の領域数の多い群で否定的自尊感情の揺れにくかった。よって, 仮説2は支持されたと言える。

そして, 「両次元の自己概念をともに多く有していない場合, 自尊感情が揺れやすい」という仮説3であるが, まず肯定的自尊感情に関しては, 肯定的自己概念領域数が少ない群でも, 否定的自己概念延べ数や領域数が少ない群でも, 肯定的自尊感情は揺れにくいと言えた。よって, 肯定的自尊感情において仮説3は支持されなかった。一方, 否定的自尊感情に関しては, 否定的自己概念延べ数や領域数, 安定した否定的自己概念数が少ない群では揺れやすかったが, 肯定的自己概念延べ数が少ない群では揺れにくいと言えた。よって, 否定的自尊感情においても仮説3は支持されなかった。

最後に, 「両次元の自己概念をともに多く有している場合, 自尊感情が揺れやすい」という仮説4についてであるが, 肯定的自己概念領域数が多い群, 否定的自己概念延べ数や領域数が多い群では, ともに肯定的自尊感情は揺れやすいと言えた。したがって, 肯定的自

尊感情において, 仮説4は支持された。ただし交互作用が見られなかった点で, 両次元の自己概念の領域数が相互に作用しあって生じる効果は見られなかった。また, 否定的自尊感情に関しては, 肯定的自己概念延べ数が多い群では揺れやすかったものの, 否定的自己概念延べ数や領域数, 安定した否定的自己概念数が多い群では揺れにくかった。よって, 否定的自尊感情においては, 仮説4は支持されなかったと言える。

**自尊感情の肯定次元と否定次元** 肯定次元と否定次元の自尊感情の高さには,  $r = -.55$  と, やや強い負の相関が見られたが, この数値からは両次元が同一物の正反対のものであるとは言えないであろう。また, 揺れに関しても, 肯定次元と否定次元との間の相関は  $r = .18$  であり, 高い相関関係にあるとは言えなかった。さらに, 否定的自尊感情の揺れは両次元の自尊感情と関連していたのに対し, 肯定的自尊感情の揺れは否定的自尊感情のみと関連していた。これらから, 自尊感情の高さや揺れにおいて, 肯定次元と否定次元は異なると考えられ, 今後の自尊感情研究では, 肯定次元と否定次元とを区別して議論する必要があると言えよう。

**自尊感情の高さと自尊感情の揺れとの関係** 自尊感情の高さと揺れとの分散分析の結果からは, 肯定的自尊感情は, 否定的自尊感情の揺れの大きい群で高いと言えた。また, 否定的自尊感情は, 否定的自尊感情が揺れにくい群においては, 肯定的自尊感情が揺れやすい群で高く, 肯定的自尊感情が揺れやすい群においては, 否定的自尊感情が揺れにくい群で高いと言えた。

この結果から, 肯定的自尊感情を高めるには, 否定的自尊感情を固定させないようにすることが有効である可能性が示唆される。また, 否定的自尊感情を低下させるためには, 否定的自尊感情が固定している場合には安定した肯定的自尊感情を作ることが, また肯定的自尊感情が揺れやすい場合には否定的自尊感情を揺らぎやすいものにすることが有効である可能性が示唆される。

**自己概念と自尊感情の高さとの関係** 肯定的自尊感情の高さは, 肯定的自己概念延べ数が多い群, 安定した肯定的自己概念数が多い群, 肯定的自己概念が多領域にわたっている群, 否定的自己概念延べ数が少ない群, 安定した否定的自己概念数が少ない群, 否定的自己概念が多領域にわたっていない群で高かった。一方, 否定的自尊感情の高さは, 安定した肯定的自己概念数が少ない群, 肯定的自己概念が多領域にわたっていない群, 否定的自己概念延べ数が多い群, 安定した否定

的自己概念数が多い群、否定的自己概念が多領域にわたっている群で高かった。

つまり、自尊感情は同一次元で安定した自己概念が多いと、また、多領域にわたって自己概念を保持していると、その次元の自尊感情が高くなるが、もう一方の次元での自尊感情の高さは抑制されると言える。このことは、肯定的自尊感情を高めるためには、肯定的自己概念を作る以外にも、否定的自己概念の数や重要な領域を減らすことも大切であり、否定的自尊感情を低くするためには、否定的自己概念の数を減らす以外にも、安定した肯定的自己概念を作ったり、肯定的自己概念の領域を増やすことも大切であると考えられよう。また、否定的自己概念延べ数が多い群では肯定的自己概念延べ数の多少による差が見られなかったことから、否定的自己概念延べ数が多い場合、単に肯定的自己概念を作ったとしても否定的自尊感情は改善しにくい可能性が考えられよう。このことから、否定的自己概念を多く持つ人が否定的自尊感情を低くするためには、肯定的自己概念を作ろうとするよりも、まず保持している否定的自己概念に向き合うことが重要であると考えられる。

**自己概念と自尊感情の揺れとの関係** 肯定的自尊感情の揺れは、有意傾向も含めると肯定的自己概念の領域数が多い群で大きく、また否定的自己概念延べ数の多い群や否定的自己概念領域数の多い群でも大きかった。これは、肯定的自尊感情の揺れは同一次元の自己概念だけでなく、反対次元である否定的自己概念がどの程度豊富であるかとも関係していることを示唆するだろう。一方、否定的自尊感情の揺れは、有意傾向も含めると、肯定的自己概念延べ数が多い群で大きく、また、否定的自己概念延べ数や領域数の多い群、安定した否定的自己概念数の多い群で小さかった。これは、否定的自尊感情の揺れも、同一次元の自己概念だけでなく反対次元である肯定的自己概念がどの程度豊富であるかとも関係していることを示唆するだろう。

以上のことから、まず、自尊感情の揺れは当該の自尊感情とは反対次元の自己概念の量が多い群で大きく、反対次元の自己概念の量の促進効果を受ける可能性が示唆される。しかし一方、当該の自尊感情と同一次元の自己概念との関係は、肯定的自尊感情の揺れと否定的自尊感情の揺れでは異なると言えた。つまり、肯定的自尊感情の揺れに対しては肯定的自己概念の領域数の促進効果が示唆されるのに対し、否定的自尊感情の揺れに対しては否定的自己概念延べ数や領域数、安定した否定的自己概念の数の緩衝効果が示唆される。

したがって、自尊感情の揺れは、自己概念の中でも自己概念延べ数が多いのか、それとも領域数や安定した自己概念数が多いのかによって異なるだけでなく、肯定、否定次元の差異によっても異なると言え、自尊感情の揺れと自己概念の関係を扱う際には、ともに肯定次元と否定次元とを区別する必要があると言えよう。

**自尊感情の揺れの方向性と二面性** さて、自尊感情の高さと自己概念との関係において、肯定的自己概念の領域数が多い群で肯定的自尊感情が高かったことを考えると、肯定的自己概念の領域数が多いことで生じる肯定的自尊感情の揺れは、肯定的自尊感情の高さを上昇させる方向の揺れと考えられる。一方、否定的自己概念延べ数や領域数が多い群では肯定的自尊感情が低かったことを考えると、否定的自己概念延べ数や領域数が多いことで生じる肯定的自尊感情の揺れは、肯定的自尊感情の高さを低下させる方向の揺れと考えられる。よって、肯定的自尊感情の揺れは、肯定、否定のどちらの自己概念が分化しているかによって、揺れる方向性が異なると考えられよう。

一方、否定的自尊感情の揺れの方向性に関してであるが、自尊感情の高さと自己概念との関係において、否定的自己概念延べ数が少ない群の中での肯定的自己概念延べ数が多い群や、否定的自己概念延べ数や領域数、安定した否定的自己概念数が少ない群では否定的自尊感情が低かった。このことから、肯定的自己概念延べ数が多いことや否定的自己概念延べ数や領域数、安定した否定的自己概念数が少ないことで生じる否定的自尊感情の揺れは、ともに否定的自尊感情の高さを低下させる方向の揺れと考えられよう。

このように揺れの方向性を考慮すると、両次元の自己概念がともに多い群では、肯定的自己概念の領域数が多いことによって肯定的自尊感情が高まりやすい側面を持つ一方で、否定的自己概念延べ数や領域数が多いことによって肯定的自尊感情が低下しやすいという側面も持つと考えられる。つまりこの群においては、肯定的自尊感情の安定性に関して相反する側面を有しており、内面で葛藤が生じやすい可能性があると考えられよう。

また、否定的自尊感情の揺れに関する仮説3と仮説4の検討からは、両次元の自己概念とも少ない群と両次元とも多い群、いわば二面性をもつ群では、ともに個人内で否定的自尊感情が安定しやすい側面と揺れやすい側面とが存在すると考えられる。つまり、否定的自尊感情の安定性に関して正反対の側面を有しており、内面で葛藤が生じやすい可能性が考えられよう。

西川(1992)は、矛盾する自己概念をあまり持たずにはいると自己概念が成熟する可能性を狭くする一方で自己概念の統合はしやすくなると述べ、また広瀬(1989)は、二面性を多く持つと自己概念が成熟する可能性が広がる一方、自己概念間の矛盾も大きくなり、自分が統合できなくなる恐れもあると述べている。つまり、本研究における2群が自己概念の成熟しやすさや、精神的健康と関係する可能性が考えられよう。

本研究におけるこれらの2群が実際に自尊感情に関して葛藤を経験しているか、また、長期的にみて自己概念を成熟しやすいのかや、精神的健康と関係があるのかも本研究からは明らかでない。これらについて、今後改めて検討してゆくことが必要であろう。

**本研究の限界と今後の課題** 本研究では、個人内と同じ自己概念領域において肯定次元と否定次元が分化しているかについての統制を行わなかった。よって、今後は自己概念の領域を統制した上で、各次元の自己概念がどのように影響しあうかを検討する必要があろう。また、1ヶ月おきに3回の測定をしたが、この期間と回数で中期的な自尊感情の揺れとしてよいかについても十分な吟味が必要であろう。また本研究は実験的操作を加えていないため、関係の解釈は推測の域をでない。特に、本研究では自己概念自体の揺れは測定していないため、自尊感情の揺れが自己概念の揺れに起因していたか否かや、それとも今回の調査では測定していない要因によって生じたのかは明らかではない。さらに、本研究は集団質問紙調査によって行ったため、個人が内面を表現することへの抵抗が生じた可能性や、回答状況が結果に影響した可能性も否めない。よって、今後は、条件を統制した実験研究を行い、自己概念の揺れと自尊感情の揺れとの関係や、自尊感情の揺れに影響を与える要因を改めて検討する必要があろう。

### 総合考察

本研究では、自尊感情の中期的な揺れと自己概念との関係を扱った。その結果、各次元の自己概念延べ数や領域数などの水準によって、各次元の自尊感情の長期的な揺れの大きさに差があった。そして、肯定的自尊感情を高めたり否定的自尊感情を低くする際に、自尊感情の揺れや自己概念へ介入する事が有効である可能性が示唆された。

青年期が、アイデンティティ(Erikson, 1959)をはじめとする自己にとって重要な自己概念を形成する時期であることを考えると、自尊感情が揺れた際に、自己に注目が向いて自己概念について考え直すことが、重

要な自己概念の形成にとって大切であると考えられる(溝上, 1999)。つまり、一概に自尊感情の揺れを否定的には捉えられないと言え、自尊感情が揺れる際に、揺れた自尊感情をいかに回復し、自己概念をいかに再編するかに注目することが重要であり、また自尊感情の揺れが自己概念形成の契機になりうる可能性も考慮する必要があると言える。

また、成人期になるにつれ、自尊感情が安定していくことを考えると、長期的な揺れの中で自己概念が形成されるうちに自尊感情は安定してゆくものと考えられる。しかし一方で、「青年期平穏説」(村瀬, 1976)に見られるように、自尊感情が揺れることなく自己概念を形成してゆく者もいると考えられる。青年期を終えたとき、自尊感情の揺れを経験した者としていない者とでは、自己概念の安定度等に差があるかもしれない。また、二面性群で考察したように、同じ自尊感情の揺れでも個人内における自己概念の様相によっては、長期的には自己概念の形成などに差を生じる可能性があろう。これらについては今後の検討が必要であろう。

なお本研究からは、何が自尊感情の揺れの契機となるかは明らかでなかったが、コーピングや原因帰属などが自尊感情の揺れに影響する可能性が考えられる。また、青年期において何が自尊感情の揺れに関与し、その揺れから個人が何を得て、どのような過程を経て自尊感情が安定してゆくのか、また、自尊感情が安定しながら過ごす者と揺れながら過ごす者とで形成された自己概念に違いがあるか等についても、現在のところ明らかではない。今後の幅広い研究が必要であろう。

### 引用文献

- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Bulletin*, **111**, 497-529.
- Crocker, J. (2002). The costs of seeking self-esteem. *Journal of Social Issues*, **58**, 597-615.
- Crocker, J., & Wolfe, C. T. (2001). Contingencies of self-worth. *Psychological Review*, **108**, 593-623.
- Dixon, T. M., & Baumeister, R. F. (1991). Escaping the self: The moderating effects of self-complexity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **117**, 363-368.
- Dweck, C. (1986). Motivational processes affecting learning. *American Psychologist*, **41**,

- 1040-1048.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York : W. W. Norton. (エリクソン, E. H. 小此木啓吾(訳) (1973). 自我同一性 誠信書房)
- Griffin, D. W., & Bartholomew, K. (1994). Models of the self and other : Fundamental dimensions underlying measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 430-445.
- Hattie, J. (1992). *Self-concept*. Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum.
- 広瀬 隆 (1989). 青年期における自己の二面性について 同一性感覚との関連より 心理臨床学研究, **6**, 4-18. (Hirose, T. (1989). A study on the two-sidedness of the self on adolescence : In relation to a sense of ego identity. *Journal of Japanese Clinical Psychology*, **6**, 4-18.)
- James, W. (1892). *Psychology : The briefer course*. New York : Henry Holt. (ジェームス, W. 今田 恵(訳) (1956). 心理学 岩波書店)
- 梶田叡一 (1988). 自己意識の心理学(第2版) 東京大学出版会
- Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, **14**, 1-26.
- Kernis, M. H., Cornell, D. P., Sun, C. R., Berry, A. J., & Harlow, T. (1993). There's more to self-esteem than whether it is high or low : The importance of stability of self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 1190-1204.
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1989). Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 1013-1022.
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Mathis, L. C. (1991). Stability of self-esteem as a moderator of the relation between level of self-esteem and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 80-84.
- Linville, P. W. (1985). Self-complexity and affective extremity : Don't put all of your eggs in one cognitive basket. *Social Cognition*, **3**, 94-120.
- 溝上慎一 (1997). 自己評価の基底要因とSELF-ESTEEMとの関係—個性記述的観点を考慮する方法としての外在的視点・内在的視点の関係—教育心理学研究, **45**, 62-70. (Mizokami, S. (1997). The relationship between regulating factors of self-evaluation and self-esteem : Relationship between inner and outer frame as an idiographic approach. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **45**, 62-70.)
- 溝上慎一 (1999). 自己の基礎理論—実証的心理学のパラダイム 金子書房
- 村瀬孝雄 (1976). 青年期危機概念をめぐる実証的考察 笠原 嘉・清水将之・伊藤克彦(編) 青年の精神病理1 (pp. 29-52) 弘文堂
- 西川隆蔵 (1992). パーソナリティの開放性-閉鎖性に関する研究—精神健康性, 創造性, 自己意識との関係について— 教育心理学研究, **40**, 37-46. (Nishikawa, R. (1992). A study on openness-closedness of personality : Relation to mental health, creativity and self-consciousness. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **40**, 37-46.)
- 小塩真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, **10**, 35-44. (Oshio, A. (2001). Narcissistic personality, instability of self-image, and level of self-esteem and its stability. *Japanese Journal of Personality*, **10**, 35-44.)
- Rafaeli-Mor, E., & Steinberg, J. (2002). Self-complexity and well-being : A review and research synthesis. *Personality and Social Psychology Review*, **6**, 31-58.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ : Princeton University Press.
- Rosenberg, M. (1986). Self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self*, Vol.3 (pp. 107-135). Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum.
- 佐藤 徳 (1999). 自己表象の複雑性が抑鬱及びライフィベントに対する情緒反応に及ぼす緩衝効果について 教育心理学研究, **47**, 131-140. (Sato, A. (1999). Complexity of self-representation

- as a cognitive buffer against depression and affective responses following life events. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **47**, 131-140.)
- Tennen, H., & Herzberger, S. (1987). Depression, self-esteem, and the absence of self-protective attributional biases. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 72-80.
- Woolfolk, R. L., Novalany, J., Gara, M. A., Allen, L., & Polino, M. (1995). Self-complexity, self-evaluation, and depression : An examination of form and content within the self-schema. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 1108-1120.

## 謝 辞

本研究は、2004年度に京都大学大学院教育学研究科に修士論文として提出したものを再分析し、加筆修正したものである。ご指導下さいました京都大学東山紘久先生、伊藤良子先生、楠見孝先生に深く感謝いたします。

(2006.11.8 受稿, '08.4.9 受理)

## *Baseline Instability of Self-Esteem and Self-Concept in Late Adolescence*

MUNETADA HARADA (GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION, KYOTO UNIVERSITY)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2008, 56, 330—340

The present study explored the relationship between baseline instability of self-esteem and self-concept in late adolescence. Three times in 1 month, university students ( $N=243$ ; average age 19.5 years  $\pm$  1.3 years) completed 2 instruments : the TS (Two-Sided)-WHY method, and the Mizokami Self-Evaluation Scale. From the resulting data, the relationship between instability of self-esteem and self-concept was examined. The results showed that instability of positive and negative self-esteem differed, depending on the extent of self-concepts and categories in each dimension. These results suggest that an intervention in the stability of individuals' self-esteem and self-concept may be effective for increasing positive self-esteem and decreasing negative self-esteem. However, instability of self-esteem is not necessarily negative, in that it gives individuals an opportunity to examine their self-concept and create important self-concepts.

Key Words : baseline instability of self-esteem, level of self-esteem, self-concept, contingency of self-esteem, late adolescence